

共通語としての英語 (ELF) 話者の アイデンティティ研究におけることばの相互行為分析と ナラティブ・アプローチの融合の可能性

野 上 陽 子

1. はじめに

本稿では、共通語としての英語 (English as a lingua franca: 以下 ELF) を通じた異文化コミュニケーションにおける ELF 話者のアイデンティティ形成と変容に関する調査を行ううえでの、ことばの相互行為分析とナラティブ・アプローチを融合させることの有効性について考察したい。

近年、応用言語学分野でも第二言語話者のアイデンティティ構築に関する多くの研究が行われるようになってきている。アイデンティティとは、一般的にはポスト構造主義 (poststructuralism) の視点から「社会文化的な要素に影響を受けつつ、人が自己をどのように捉えるか」を概念化したものと定義される (Norton 2000, Weedon [1987] 1996)。アイデンティティの構築に影響を与える社会的文化的な諸要素は重層的かつ流動的であるため、一見相反するような複数のアイデンティティが個人のなかに存在する。またそれらのアイデンティティは同時に表象されることもあり、個々人が自身をどのように捉えるかは時と場合によって変化しうる。こうしたことを踏まえて、例えば第二言語話者を調査対象とした研究では、個人がアイデンティティを構築するプロセス、複数のアイデンティティの間で生じる矛盾やもがきなどの様相が明らかにされてきた (e.g., Block 2005, Norton 2000, Kamada 2009)。これらの研究は、インタビューや日記などの語りをデータとするナラティブ・アプローチを用いて、対象者自身の経験を中心としたエミックな視点 (emic perspective) から第二言語話者のアイデンティティについて考察している。

また応用言語学分野では、第二言語話者たちが参加するコミュニケーションから産出される言語形式 (linguistic forms) およびことばの相互行為の分析とナラティブ・アプローチを融合させた研究が求められるようになってきている (北出 2013)。しかしながら、ナラティブ・アプローチに加えて言語形式やことばの相互行為にも焦点を当てた研究は、管見の限りでは存在しない。したがって本稿では、ことばの相互行為分析とナラティブ・アプローチの融合の可能性を論じた文献研究をまとめ、そこから得られた知見を実際のデータ分析に応用することで、ことばの相互行為分析とナラティブ・アプローチを融合し

た方法論の有効性と今後の課題を探る。ただし本稿でのデータ分析は、あくまでも試験的なものにとどまることをあらかじめ断っておく。

次節では導入として、まず研究の背景にある ELF 研究の視座がどのようなものを概説する。続いてナラティブ・アプローチとことばの相互行為分析について、それぞれの要点や課題を示す。

II. 研究の背景

1. ELF 研究

ELF とは、「少なくとも 1 人の話者が第二言語として使用し、複数の話者たちの間で接触言語として使用される英語 (“English used as a contact language between speakers when at least one of them uses it as a second language”）」と定義される (Mauranen 2018: 8)。そしてこの定義では明示されていない理論的視座として、ELF 研究では以下のことが重視される。

外国語・第二言語教育分野では、英語母語話者 (native speaker: NS) と非母語話者 (non-native speaker: NNS) を二項対立的に捉え、NS と比べて NNS が言語使用上で劣っている点を問題視することが多い。しかしながら、ELF 研究ではそのような見方が批判されている。ELF 研究では NS を含む ELF コミュニケーションも対象とするが、決して NS を基準としては扱わない。ELF コミュニケーションとは、NS/NNS に関係なく ELF 話者たちが相互行為の過程で形作っていくものとして捉えられ、すべての ELF 話者は多言語多文化の背景を持った多様なことばの使用者として対等に位置づけられる (Baker 2009, Cogo 2009)。そしてもし何らかのコミュニケーション上の問題が発生した場合は、言語の習得レベルの違いなどを分析の変数とするのではなく、参加者全員に責任があるものとする。こうした視座から ELF 研究者たちは、ELF コミュニケーションの参加者がそれぞれどのように問題の解決に向けて努力し、コミュニケーションを円滑に進めようとしているのかについて調査を行ってきた。それらの調査では、ELF 話者が様々な言語・語用論的ストラテジー¹⁾を使って、相互理解を確実なものにしようと尽力したり (Maruränen 2006, Kaur 2009, Cogo 2009)、グループ内での協力する姿勢や相手との団結を表現したりしている (Cogo 2009, Hülmbauer 2009, Pitzel 2009, Matsumoto 2014) といったことが明らかにされてきた。

他方、ELF の特徴として、大抵の ELF コミュニケーションは地域や国境を越えた人々の身体的および仮想的な移動による一時的または不定期な接触から起こるため、「曖昧な

1) 例えば代表的なものとして直接的な質問を通じた明確化の要求、自己修正、繰り返し (Maruränen 2006)、言い換え (Kaur 2009, Cogo 2009)、慣用表現やユーモアの共同構築 (Pitzel 2009, Matsumoto 2014) が挙げられる。

コミュニティ」(diffuse communities) を形成するだけにとどまる場合が多いということがある (Mauranen 2018: 11-12)。つまり ELF コミュニケーションには、従来の社会言語学的・地理政治学的な国や地域で区別を図るような言語コミュニティ概念が適用できない。通常の言語コミュニティにおいては、ある程度同じような背景を持っていると考えられている話者たちが、定期的にコミュニケーションを取ることによって言語実践が繰り返し行われ、その言語実践が定着したり習慣化したりするが、ELF コミュニケーションのような一時的かつ不定期なやりとりが散在する場合には、社会言語学的な共通の標準化はあまり見られない (Mauranen 2018)。しかしながら、ELF 話者は誰しもが多言語多文化的な背景をもっており、彼ら／彼女らが参加する ELF コミュニケーションは、どのような環境で行われようとも現代のグローバル化や都市化が進んだ環境を表象しているとされる (Mauranen 2018)。参加する人々の時に強く、時に弱いつながりによってなされる ELF コミュニケーション (Mauranen 2018) は、現代におけるコミュニケーションの多様性を反映する鏡とも言え、それを対象とした社会言語学的研究の意義は決して小さくはないだろう。

2. ナラティブ・アプローチ

第二言語話者のアイデンティティ構築の様相を考察するための主要な研究手法として、ナラティブ・アプローチが挙げられる (e.g., Block 2006, Norton 2000)。ナラティブ・アプローチは社会学や社会心理学でよく用いられる質的方法であり、フィールドワーク、インタビュー、日記や自叙伝などの複合的なデータセットから話し手・書き手の「生きられた経験 (lived experience)」を物語として捉え、そこに話し手・書き手のアイデンティティがどのように表象されているのかを考察する (Clandinin and Connelly 2000, Clandinin 2007, Etherington 2007)。またそのなかで、人がいかに自らの生活において主観的な意味を見出すのか、また物語が明らかになるにつれて、その語り手が自己の位置づけをどのようにまとめていくのかを検討することもナラティブ・アプローチの要点である (Clandinin and Connelly 2000, Clandinin 2007)。

筆者が研究対象としている ELF に関しても、ナラティブ・アプローチを用いた ELF 話者のアイデンティティ構築に関する研究成果が上げられている。その例として、文法的正しさに気を取られがちな英語学習者としてのアイデンティティから、多くの ELF コミュニケーションに関わることによって間違いを恐れずにコミュニケーションが良いものになるよう意識を向ける ELF 話者としてのアイデンティティへの変容プロセスに関する研究がある (Kalocsai 2014, Nogami 2020a, Phan 2009, Virkkula and Nikula 2010)。また英語教育者を対象として、英語学習者のお手本としての「正しさ」や「規範的」な英語使用が重要であるという考えに典型的な英語教師としてのアイデンティティと、標準英語の規範から「逸脱」する英語への寛容な態度に代表される一英語話者としてのアイデンティティ

の間での葛藤や、様々な英語変種（例えばインド英語、シンガポール英語など）に対する矛盾した態度に焦点を当てた研究もなされている（Jenkins 2007, Pedrazzini and Nava 2011, Phan 2008）。さらには、多様な ELF コミュニケーションに関わるなかで様々なアイデンティティ（例えば「～人」としてのアイデンティティ、多言語を操るマルチリンガルアイデンティティ、グローバル化のなかで生まれる越境的な文化資源に関わるアイデンティティなど）が交差する様子を明らかにすることから、ELF 話者のアイデンティティ構築を論じた研究も見受けられる（Baker 2009, Nogami 2020a, b, Sung 2014）。このように、ナラティブ・アプローチは、言語話者本人の主観的視点からみたアイデンティティ構築の様相を、彼ら／彼女らを取り巻く言語イデオロギーや社会文化的背景と照らし合わせて考察することで、現実の動態に根ざした発見を可能にしてきたと言えよう。

しかしながら、ナラティブ・アプローチのみを用いた研究に対しては、実際のことばの相互行為のなかで「実践されるアイデンティティ」の観察に欠けるとの指摘がなされている（北出 2013: 290）。つまり、ナラティブ・アプローチで明らかにされる「語られるアイデンティティ」は、ことばの相互行為のなかで実際に示される自己の位置づけ（positioning）および他者から見たポジショニングと異なる可能性が考えられるのである（北出 2013）。前述のように、アイデンティティが他者とのかかわり合いや社会文化的相互行為を通じて構築されるものであるということからしても、今後の応用言語学におけるアイデンティティ研究には、ナラティブ・アプローチに加えて実際の相互行為における言語使用や他者とのやりとりで表象されうるアイデンティティの交渉に迫ることが求められるだろう。そしてその可能性の1つとして、ナラティブ・アプローチとそれ以外のデータを多角的に組み合わせた研究に期待が寄せられている（北出 2013）。

3. ことばの相互行為分析

ナラティブ・アプローチによるアイデンティティ研究が発展する一方で、従来ことば（discourse）とアイデンティティに関する研究も蓄積されてきている。それらの代表的な分野として、変異理論の社会言語学（variationist sociolinguistics：以下 VS）、批判的言説分析（critical discourse analysis：以下 CDA）、会話分析（conversation analysis：以下 CA）が挙げられる。これらの3つの分野でアイデンティティが議論される場合、実際に研究対象者が使用したことばそのものとアイデンティティの関係について、研究者の客観的な視点および既存の理論にもとづく科学的な解明が目指される。よってアイデンティティに対する解釈も、構造主義的な視点からなされる場合が多い。

上記の3分野は、ことばの分析をする際に、それぞれ言語形式、イデオロギー、ことばの相互行為のいずれかに焦点を当ててデータを考察する。各分野がその特徴としてアイデンティティとことばの使用実践をどのように関連づけているのかという研究動向を、本稿の文脈に沿った形ではあるが簡単にまとめておこう。

VSとCDAに関して、まずVSはことばの使用者の社会背景 (e.g., 年齢、人種、社会的地位など) を変数として言語形式のパターンに相関関係があるかを検証し、話し手の固定的なアイデンティティと言語形式を結びつけて議論する。次にCDAでは、実際に使用される言語形式を力関係や社会的不平等などのイデオロギーと結びつけ、隠れた社会的規範が言語形式と話し手のアイデンティティに表象されていることを批判的に論じる。ただしVS研究もCDA研究も、ことばの相互行為は分析対象としていないため、会話の参加者同士が実際のやり取りのなかでアイデンティティを交渉する様子は議論の範疇に入っていない。また、イデオロギーや言語形式とアイデンティティの関連づけについては、既存の枠組みを無批判に適用しているという点で、批判の対象にもなっている (McEntee-Atalianis 2019, Rampton 2016)。

最後に、CAにおけるアイデンティティとは「在る」ものではなく、その時、その場での相互行為のなかで表象される社会的な「行為」として捉えられている (池田 2007)。よってCAでは、ことばの相互行為のなかでの人々の微細なやり取りや詳細な言語形式の分析をもとに、いかに会話の参加者たちが協働作業的に「立ち位置」や視点を示しながら、自他の社会的アイデンティティを構築ないし「行為」しているのかを解明する。またCA研究では、データ (i.e., 相互行為の緻密なトランスクリプト) 上の観察可能なことだけが分析の対象となることも特徴的であり、例えば会話参加者の性別、年齢、社会的地位などに代表される人口統計学的な情報、より広い社会的構造やイデオロギーなどは、分析に影響を与えない。CAは、会話参加者が自らの属する社会において「当たり前」に行っている社会的行為における秩序や規則性を発見し、その特徴を記述・分析するものであり、その「当たり前」はその社会に属する人間 (データ分析を行う研究者を含める) の常識的かつ暗黙理の仮説にもとづいて議論されることが多い。そしてこの点が、批判の対象となることもある (McEntee-Atalianis 2019, Rampton 2016)。

ことばの相互行為の実践とアイデンティティの構築について研究を行う場合に重要となるのは、言語形式、イデオロギー、ことばの相互行為をバランス良く考察することによって、マクロな社会・文化・言語的背景とミクロなことばの相互行為を融合させた分析である (McEntee-Atalianis 2019, Rampton 2016)。しかしながら、上記の3分野は、言語形式、イデオロギー、ことばの相互行為のいずれかが分析対象から欠けており、「個々の社会的、修辭的、言語的ポジショニングなど重要な視点が曖昧になる」 (Rampton 2016: 472) 危険性をはらんでいる。そのため、3分野を補完し合い、なおかつナラティブ・アプローチにおけるポスト構造主義の視点のアイデンティティの考え方と齟齬のない研究アプローチを用いることによって、より広い社会言語的構造や、ある社会言語的特徴が構築されるプロセスを知ることができる。そしてそのための具体的な提言の1つと考えられるのが、Bucholz and Hall (2005) の sociocultural linguistic approach である。

4. Bucholz and Hall (2005) の Sociocultural Linguistic Approach

Bucholz and Hall (2005) の sociocultural linguistic approach では、ことばの相互行為のなかでアイデンティティを分析する際に注視すべきアイデンティティの5つの原理 (emergence, positionality, indexicality, relationality and partialness) が提示されている。それぞれの要点を簡約していくと、まずアイデンティティはことばの相互行為を通じて出現する (emergence)。またことばの相互行為のなかで、参加者は主観的かつ間主観的に自他を位置づけ、矛盾するような位置づけを同時にすることもある (positionality)。そうした自他の位置づけは、ことばの相互行為のなかで使用される様々な言語表現によって示されるとともに、それらの表現は自他のポジショニングのために使用される (indexicality)。また相互行為で使用されることばは、広義的なイデオロギーにも影響されている。Bucholz and Hall (2005) は indexicality に関する分析の指標になる言語表現として、a) 自他カテゴリーへの言及、b) 自他のポジショニングに関する会話的含意や暗示の使用、c) 会話の話題に対する評価的・認識的立場の表明や、会話における自己の役割や位置づけ、d) コードスイッチングや方言の使用なども含めた異なる言語体系の使用、を挙げている。4つ目の relationality は、アイデンティティが自己の様々なポジショニングや社会的行為に参加する他者との関係性のうえに存在し、また多様な関係性が絡み合うなかで構築されるということの意味する。その関係性としては、a) 自己と他者の相違点 (adequation and distinction)、b) 話し手が自分が「本物であること」を証明しようとしたり、自己の巧みさを主張したり、反対に他者が話し手の本来の性質を奪ったり、話し手の正統性の主張を覆そうとしたりする点 (authentication and denaturalization)、c) 話し手のアイデンティティを肯定または否定するといったような、ことばの相互行為における参加者のアイデンティティの構築の様子を、社会構造的なパワーやイデオロギーを通じて捉えることができる点 (authorization and illegitimation) が挙げられている。最後に5つ目の原理として、アイデンティティの構築は不完全性や部分性という性質を持っており (partialness)、自己の意志のみで構築できるものではなく、常にイデオロギーや対話のプロセスなどによる制約を受けているとされる。

Sociocultural linguistic approach の5つの原理のうち、emergence, positionality, partialness には、ポスト構造主義的なアイデンティティの定義や性質との整合性を認めることができる。したがってナラティブ・アプローチからアイデンティティについて考察する際にも、理論的一貫性が担保される。また indexicality と relationality に関しては、実際にことばの相互行為の分析を行う際に、どのような言語形式や表現、ことばのやり取りを注視すればよいか明示されている。このことは、McEntee-Atalianis (2019) や Rampton (2016) が提言する言語形式、イデオロギー、ことばの相互行為すべての考察からマクロな社会・文化・言語的背景とミクロなことばの相互行為を融合させる分析にとって、有益な指標になると考えられる。

Ⅲ. 研究の方法と対象

本稿では、ELF を通じた異文化コミュニケーションにおける ELF 話者のアイデンティティの形成と変容を明らかにするために行った調査から、ELF 話者が参加することばの相互行為のデータと、参加者それぞれに対するインタビューのデータを取り上げる。前者では、ことばの相互行為のなかで行われる ELF 話者の自他のポジショニングが、どのような様相の記号論的手段 (semiotic means) として現れているかに着目した。後者では、ELF 話者のアイデンティティ構築をより多角的に捉えるべく、それぞれが語る自己の位置づけやその過程に影響する社会文化的要素の解明を目指した。

ことばの相互行為データは、留学中の日本人研究協力者1名とその友人である研究協力者2名の計3名による1時間程度の会話である。会話のトピックは研究者側からは指定せず、参加者が普段生活で使用している英語で自由に話してもらった。会話の様子はテーブルに置いた4方向を同時に分割撮影できるカメラと、全体を映すカメラの2機で記録し、会話が続いている間筆者はその場から離れていた。その後逐語録を作成し、映像で判断できる会話参加者の目線の動きや、物の受け渡しなどのメモを逐語録に随時追加した。音声データだけでなく、映像で確認できる行動を逐語録に加えることは、会話参加者の自己の位置づけが様々な言語的かつ非言語的な記号論的手段を通じて実行、表現される (McEntee-Atalianis 2019) という分析上の視点において重要であった。

次に、会話参加者へのインタビューは、上記の会話セッションの2~4日後に実施した。会話に参加した3名のそれぞれと研究者の一对一で、時間は1時間から1時間半程度だった。お互いの共通の言語である英語が主要言語として用いられたが、日本人の参加者の場合は一時的に日本語に切り替えることもあった。インタビューでは、参加者の年齢、国籍、言語背景、外国滞在歴などの基本情報や、第二言語・外国語の使用頻度や使用状況などを確認したあと、会話セッションで参加者本人が最も印象に残っていることを中心に語ってもらい、その語りのなかで研究者が気になった点を質問して参加者のさらなる語りを引き出す半構造化インタビューの形式で進めた。また会話データのなかでの参加者の言語使用や行動・しぐさなどについても質問をした。インタビューの内容は録音し、逐語録を作成した。

本稿で扱うデータは、コスタリカにある教育媒介言語が英語 (EMI) の大学院にて収集したものである。研究協力者はその大学院に通う3名の学生: Hisa²⁾ (日本人男性、30代半ば)、Sun (ラオス人女性、20代後半)、Sky (アメリカ人女性、20代半ば) である。この3名は所属する大学院の1年間コースの同級生であり、データ収集の時点で知り合って半年程度であった。Hisa と Sun は事前に連携するフィリピンの大学院のコースに所属し

2) いずれの名前も仮名。

ており、そこから一緒にコスタリカへ渡ってきたため、1年半程度の友人関係であった。

IV. データの分析と考察

1. ことばの相互行為の分析と考察

本稿では sociocultural linguistic approach (Bucholz and Hall 2005) における5つの原理のうち、indexicality と relationality を指標として、対象グループのことばの相互行為の分析を行った。その結果で最も特徴的だったのは、第三者の言語文化資源（本稿の場合スペイン語の使用やスペイン語圏の習慣）の使用において、translanguaging (Garcia and Wei 2014) と呼ばれる多言語話者のフレキシブルな多言語資源使用という現象が見られたことである。後のインタビュー調査からも明らかになっているが、スペイン語は会話参加者の誰しもにとって母語ではなく、日常生活での会話が可能な言語でもない。一方でスペイン語は3名が生活しているコスタリカの公用語であり、学校外での生活や大学院コース内のスペイン語話者を通じて、わずかではあるがスペイン語との接触および使用の機会を有しているとのことだった。

(1) は Sun のくしゃみに反応して、Sky と Hisa が間髪いれずほぼ同時に salud と発した場面である。

(1)

971 Sun: ((sneeze))
 972 Sky: salud=
 973 Hisa: =salud

スペイン語で「健康」を意味する salud は、スペイン語圏においては誰かがくしゃみをした際に「健康に気をつけて」という意味を込めてかけられることばでもある。くしゃみをした者への周りの反応というこの言語文化的実践は、互いの連帯感の確立や証明、換言すればグループ内での集団アイデンティティ (in-group identity) の形成につながっていると考えることができる。

またこの(1)の場面の前までは会話は英語で進んでおり、場面の後はすぐに何事もなかったかのように英語での会話へ戻った。このような translanguaging の現象は、このグループ内で参加者それぞれによる多言語多文化アイデンティティの実践 (Gu, Parkin and Kirkpatrick 2014) とみなすことができる。Sky と Hisa がほぼ同時に salud と反応したこと、Sun がそれに対して特段の反応を見せなかったことから、この言語文化的実践がすでに彼らの日常生活で当たり前の現象になっていると判断できる。英語で会話を進めているなかで、また英語圏にもくしゃみに対してかけることば (bless you) が存在するにも関わらず、3名がともにスペイン語圏の文化的資源を何気なく使用していることは、非常に興味深い。

2. ナラティブの分析と考察

続いて、上記のことばの相互行為がどのように参加者本人たちから語られたのかを、salud の使用を例に見ていこう。そしてナラティブ・アプローチの観点から、インタビュー全体で語られた彼ら／彼女らの生きられた経験やポジショニングと salud の使用を関連づけて考察することにしたい。

Hisa は、なぜ Sun のくしゃみに salud と言ったのかという質問に対して、英語の bless you を使用することを問題だと思っているからだと説明してくれた (2)。

(2)

Hisa: Yeah, once I have heard, “bless you” is a little bit controversial.

YN: Because [God bless you.

Hisa: [Because God bless you is perceived as like a religious term. Some people, current, like at present doesn't really practice their religion, and also some people are not really interested in and some people even might say like, ah, I'm not religious, so please do not say “God bless you” to me. And here in Costa Rica in Spanish, people say “salud” to people who sneeze, and I found it's good because it's like your health and no conf-, conflict wouldn't be appeared, so.

YN: You are just wishing your health by saying “salud”.

Hisa: Yeah so, maybe during my stay here, I always say “salud” to those people who did a sneeze.

(Interview with Hisa, 17: 47-19: 20)

Hisa の語りからは、たとえ所属する大学院のコースが EMI 環境にあったとしても、多様な文化・言語・宗教背景を持った学生が世界中から集まっていることに鑑みて、西洋の宗教的価値観を含んだ bless you の使用は避けたいという彼の思いが読み取れる。また Hisa は salud に宗教的な背景がなく、ただ人の健康を願うという意味があるということを知っており、そうした学びを自身に内在化したうえで言語使用の選択を行っていたことがわかる。

Hisa は20代の頃から様々な国へ渡航し、多様な価値観にふれるなかで、自己を内省してきた経験を有している。例えばコスタリカの大学院での生活を通じて、人を判断する価値基準が politeness から fairness に変わってきたという語りがあった。Hisa の母国の日本では「丁寧」であることがその人がいい人であると判断する「基準」になっており、コスタリカ渡航以前はそのような「基準」が一般的だと考えていた。しかしコスタリカの大学院での経験を通して、彼は “B is a polite person.” は “B is a nice person.” とは必ずしも繋がらないということに気づいたという (3)。

(3)

Hisa: だけど、友達と話していても、その「彼がいい人だよ」と言うけど、「polite だね」みたいなことはあまり聞かない。それよりも fair か fair でないかと言う言葉の方がよく聞く。日本にいと、「あの人、丁寧でいい人だよ」「丁寧だよ」みたいな、なんか言い方で人を評価されているような気がするけど。なんだろう、fair っていう価値観の方が、なんか独占って言うか支配的な気がする。僕だけでなく、友達と話してても

[…]

Hisa: 僕の中で丁寧さと言うのが、ほとんどなんか減退している。だから日本にいた時はそういう価値基準がすごくあったけれど、ここに来て、僕も fair みたいな感じに見ている。人を

(Interview with Hisa, 46: 08-47: 08)

また Hisa は、他者の言うことに賛成か反対かは関係なく、誠意を持って耳を傾け理解を深めようとする姿勢を持つことが fairness であり、自身も polite であることよりも fair な人間でいたいという感覚を持つようになったのだと語っていた。このように Hisa は、多言語多文化環境における英語でのコミュニケーションにおいて固定的な価値観に囚われず、ことばを「自分のもの」として使えるようになってきたのだと考えることができる。

次に、Sky の語りを紹介する。salud を使用した理由を問う質問に対して、Sky はまず現在スペイン語圏に暮らしているので、現地の習慣に順応することが適切だからだと説明している (4)。加えて、英語圏で一般的に使用される他者のくしゃみへの反応である bless you に違和感を感じるようになったこと、また salud が自身にとって愛着をもって受け入れられることを理由と挙げている。

(4)

Sky: No, because I say “salud” too. So —

YN: Oh, you too okay.

Sky: Um, Yeah, I say ever since coming here.

YN: Yeah.

Sky: And learning that that’s what you say when somebody sneezes I, I love it.

[…]

YN: Right. Why do you use that? rather than “bless you” because it’s in English?

Sky: I think for probably a lot of reasons. I think, first of all, because I’m living in a Spanish speaking place.

YN: Yeah.

Sky: And that's one thing that I can say with confidence. And know that it's appropriate in this new cultural context summon. But also, I've always like felt strange about saying "bless you" after people sneeze because I had heard like all these different, like, where that came from. Where that phrase came from and what it means and like your soul, leaving your body and evil spirits coming to take its place and all these things that. Um to me, seemed quite silly. Um and I always just said it. And I never really questioned it. And then I started realizing that there's other things to say after somebody sneezes, and maybe it's not in English, but but I think that I still resonate with it more than saying "bless you".

YN: Right. Right. Do you think that you might use "salud" back in the US with your family or with your American friends?

Sky: I think so. Yeah. I think I really, there are certain things in the places that I live that I really like, attach myself to.

(Interview with Sky, 56: 00-57: 43)

Sky は幼少期から様々な国を訪れており、特に大学生の時に参加したアイスランド（半年）とニュージーランド（6週間）での実践プログラムや、現在のコスタリカ滞在中の経験を通じて、アメリカ英語にはない自身の考え方に共鳴するその土地特有の「美しい」表現を自分のもの（言語文化資源）にしてきたと言う。また Sky は異文化コミュニケーションにおける人との感情的つながりを大切に、コミュニケーションのなかで新しいことを経験すること、その経験を通じて多様な考え方を学ぶことを常に切望しているとも語っている。こうしたことから、Sky が他者それぞれの生きられた経験を尊重し、ステレオタイプの考えを持たないように意識していること、人々との表面的ではなく深いつながりを求める人生観を持っていることが読み取られた。スペイン語の salud はすでに彼女の多言語文化資源のレパートリーとなっており、英語の会話の途中にも関わらずそれを使用していることは、彼女が多言語多文化環境に身を置いて過ごすなかで培ってきた彼女自身の人生哲学の反映であるとともに、周りの人々の多様性に配慮した言語文化実践だと考えられる。

最後に、Sun の語りについて考察する。Sun の場合は、salud の使用に関して Hisa や Sky のような内在化された多言語文化資源の使用とは異なる態度が看取された (5)。

(5)

Sun: In the classroom when I sneeze and then everyone says, "Salud", everyone said at the same time, I will like to ask them what does it mean, but I don't have time to ask them, yeah.

(Interview with Sun, 56: 00)

(5) の語りにおける「私が授業中にくしゃみをした時に、みんなが salud と言っていた」との説明から、実際にこういった言語文化実践が日常的に行われていることがうかがえる。しかし Sun はなぜ EMI 大学院のコース内でのくしゃみに対する反応が salud なのかを、はっきりと認識していないようである。また彼女の他の語りからは、大学院のコース中や会話中に起こるくしゃみとそれに対する反応という日常的な場面で、わざわざ会話を止めてまで理由を追求してこなかったこと、またその過程で上記のような言語文化実践をなんとなく受け入れてきていたことがわかった。こうした Sun の受動的ともとれる態度には、彼女の異文化コミュニケーションに対する姿勢や信念が関連しているように思われる。Hisa や Sky と同じように、彼女にとってコミュニケーションとは、他者が経験してきたことを知り、そこから学びを深めることであり、特に相手の話を「聞く」、相手に対して「理解する姿勢をみせる」ことが重要であると考えていた。そのなかで、フィリピンとコスタリカでの留学まで海外生活の経験がなかった Sun は、留学中の経験を通じて学んできたことについて以下のように語っている (6)。

(6)

Sun: But when I come here, when I joined the programme, I learned by myself. Like because we come from different background and some person is so aggressive, some person is so polite and I try to learn how can I adopt myself to live with them without any conflict.

(Interview with Sun, 1: 18: 30)

上記の語りからは、Sun の多言語多文化アイデンティティのあり方として、人々と不和を起こしたり、不快感を表したりするようなことを避けて共存していくために、多様な背景を持った関係のなかに自身が適応していく姿勢が見えてくる。つまり先の受動的な態度は、彼女のこのようなアイデンティティのあり方が、くしゃみとそれに対する反応のやり取りに結びついて現れていたのだと推察することができる。

3. データの分析と考察のまとめ

ELF 話者の共通点は、それぞれが多言語多文化の背景をもつ英語話者だということである。そういった人々の集まりで共通する話題は、自他の文化的エピソードであったり、文化的知識の共有であったりするため、ことばの相互行為のなかでは様々な言語文化的資源の実践が頻繁に観察される (Gu, Parkin and Kirkpatrick 2014)。またそのような話題のなかで、会話の参加者は様々な言語・文化・記号論的資源を使用することで自他のポジショニングを行い、互いに多言語多文化アイデンティティを形成しあっていると考えることができる (Gu, Parkin and Kirkpatrick 2014)。本稿で紹介したことばの相互行為のデータに関しても、こうした ELF におけることばの相互行為の特徴が見出された。

会話の参加者に対するインタビューでの語りをことばの相互行為におけるアイデンティ

ティの表れと関連づけて分析を行うと、ことばの相互行為での自他のポジショニングの背景に、個人それぞれのストーリーがあるということがわかった。そこでは個々の人生の歴史的背景や関連する社会的影響、自国の文化や社会構造などの様々な要因が絡み合い、個々のポジショニングに影響を与えていた。またインタビューデータを用いたナラティブ・アプローチを通じて、本稿で例示したくしゃみとそれへの反応というやりとりが、すでに会話参加者共通の多言語多文化レパトリーとなっていることが明らかになった。それとともに、例えば「なんとなく自分にピッタリ」とくるような直感的であったり、「意味はよくわかっていないけど、みんなそうしているから」という受動的であったりといった会話の参加者が *salud* を使用する理由には、それぞれに異なる多言語多文化的実践への順応の仕方が反映されており、またこのような個々の差異は、グループ内の多言語多文化アイデンティティ形成のあり方を特徴づけるものとみなされた。

V. 終わりに：方法論における今後の課題

本稿では、ことばの相互行為におけるアイデンティティに関する予備的データ分析の指標として、Bucholz and Hall (2005) の *sociocultural linguistic approach* の5つの原理のうち、*indexicality* と *relationality* を適用した。紙幅の都合から提示することはできなかったが、本稿が用いたデータには、第三者言語・文化・記号論的資源を駆使した多言語多文化アイデンティティの形成の別事例、ジェンダートピックに該当する相互行為、参加者それぞれの自国文化の話題の使用、ユーモアの実践、言語教師一生徒としてのポジショニングなど、多様で複層的なアイデンティティに関することばの相互行為の実践が含まれていた。本稿の分析によって、今後こうしたことばの相互行為において表出する言語形式や参加者のやりとりを分析するにあたって、どのような点を注視すべきなのかという基準を設けることの意義が示されたと思われる。

ナラティブ・アプローチにおいては、本来ならばより時間をかけて「語られるアイデンティティ」を掘り下げる必要があるが、少なくとも参加者それぞれのストーリーを個別的に読み取ることの有効性は確認できた。同時に、ことばの相互行為とインタビューの内容を照らし合わせてアイデンティティに関する分析を進めるうえでの課題も見えてきた。それはインタビューを行う際に、ことばの相互行為の予備分析を明確なフレームワークにもとづいて行ったうえで、関連した質問を組みこむことの重要性である。本稿のデータ収集時には、ことばの相互行為の分析アプローチがまだ明確には定まっておらず、ことばの相互行為の仮分析の焦点も絞られていないまま、インタビューが実施された。その原因は海外フィールドワークの限られた時間のなかで事前に詳細な分析を行うことの困難さにあったが、今後は本研究で得られた知見をもとに、ことばの相互行為の予備分析を行い、それに関する質問を組み込んだインタビュー調査へとつなげる研究デザインがなされなければ

ならないだろう。そのようなナラティブ・アプローチとことばの相互行為分析の融合を実現することが、ELF 話者のアイデンティティ構築に対するより深い理解につながるものと期待し、本稿の結びとしたい。

謝辞

本研究は JSPS 科研費 JP16K16893（若手研究 B）の助成を受けたものである。

参考文献

- Baker, Will. 2009. Language, culture and identity through English as a lingua franca in Asia: Note from the field. *The Linguistics Journal* 4, 8-35.
- Block, David. 2006. *Multilingual identities in a global city: London stories*. Basingstoke: Palgrave Macmillan.
- Bucholtz, Mary & Kira Hall. 2005. Identity and interaction: A sociocultural linguistic approach. *Discourse Studies* 7 (4-5), 585-614.
- Clandinin, D. Jean. 2007. *Handbook of narrative inquiry: Mapping a methodology*. London: Sage.
- Clandinin, D. Jean & F. Michael Connelly. 2000. *Narrative inquiry: Experience and story in qualitative research*. Jossey-Bass: San Francisco.
- Cogo, Alessia. 2009. Accommodating differences in ELF conversations: A study of pragmatic strategies. In Anna Mauranen & Elina Ranta (eds.), *English as a lingua franca: Studies and findings*, 254-273. Newcastle upon Tyne: Cambridge Scholars Publishing.
- Etherington, Kim. 2007. Ethical research in reflexive relationships. *Qualitative Inquiry* 13(5), 599-616.
- Gu, Mingyu, John Parkin & Andy Kirkpatrick. 2014. The dynamic identity construction in English as a lingua franca intercultural communication: A positioning perspective. *System* 46, 131-142.
- Hülmbauer, Cornelia. 2009. "We don't take the right way. We just take the way that we think you will understand" -The shifting relationship between correctness and effectiveness in ELF. In Anna Mauranen & Elina Ranta (eds.), *English as a lingua franca: Studies and findings*, 323-347. Newcastle-upon-Tyne: Cambridge Scholars.
- 池田佳子. 2007. L2言語相互行為とアイデンティティ構築：ハワイにおける日系人学習者とのインタビュー談話の分析から. *Journal CAJLE* 9, 1-20.
- Jenkins, Jennifer. 2007. *English as a lingua franca: attitude and identity*. Oxford: Oxford University Press.
- Kalocsai, Karolina. 2014. *Communities of practice and English as a lingua franca: A study of Erasmus students in a central European context*. Berlin/Boston: Walter de Gruyter Mouton.
- Kaur, Jagdish. 2009. Pre-empting problems of understanding in English as a lingua franca. In Anna Mauranen & Elina Ranta (eds.), *English as a lingua franca: Studies and findings*, 107-125. Newcastle upon Tyne: Cambridge Scholars Publishing.
- 北出慶子. 2013. 相互文化グループ活動におけるアイデンティティ形成の学び：正課授業における相互文化学習活動の実践分析. *言語文化教育研究* 第11巻, 282-305.
- Matsumoto, Yumi. 2014. Collaborative co-construction of humorous interaction among ELF speakers. *Journal of English as a Lingua Franca* 3 (1), 81-107.

- Mauranen, Anna. 2006. Signaling and preventing misunderstanding in English as lingua franca communication. *International Journal of the Sociology of Language* 177, 123-150.
- Mauranen, Anna. 2018. Conceptualising ELF. In Jennifer Jenkins, Will Baker & Martin Dewey (eds.), *The Routledge handbook of English as a lingua franca*, 7-24. London: Routledge.
- McEntee-Atalianis, Lisa. 2019. *Identity in applied linguistics research*. London: Bloomsbury.
- Nogami, Yoko. 2020a. *Identity and Pragmatic Language Use: A Study on Japanese ELF Users*. New York: De Gruyter Mouton.
- Nogami, Yoko. 2020b. Understanding the ELF Phenomenon through Narrative Inquiry: A Diary Study on Identities of Japanese ELF Users. In Murata Kumiko (ed.), *ELF research methods and approaches to data and analyses: Theoretical and methodological underpinnings*, 241-257. London: Routledge.
- Norton, Bonny. 2000. *Identity and language learning*. Harlow, England: Pearson Education.
- Pedrazzini, Luciana & Andrea Nava. 2011. Researching ELF identity: A study with non-native English teachers. In Alasdair Archibald, Alessia Cogo & Jennifer Jenkins (eds.), *Latest trends in ELF research*, 269-284. Newcastle on Tyne: Cambridge Scholars Publishing.
- Phan, Le Ha. 2008. *Teaching English as an international language: Identity, resistance and negotiation*. Clevedon: Multilingual Matters.
- Phan, Le Ha. 2009. English as an international language: International student and identity formation. *Language and International Communication* 9 (3), 201-214.
- Pitzl, Marie-Luise. 2009. "We should not wake up any dogs": Idiom and metaphor in ELF. In Anna Mauranen & Elina Ranta (eds.), *English as a lingua franca: Studies and findings*, 298-322. Newcastle: Cambridge Scholars.
- Rampton, Ben. 2016. Styling and identity in a second language. In Sian Preece (ed.), *The Routledge handbook of language and identity*, 458-475. London: Routledge.
- Sung, Chit Cheung Matthew. 2014. Global, local or glocal?: Identities of L2 learners in English as a lingua franca communication. *Language, Culture and Curriculum* 27(1), 43-57.
- Virkkula, Tiina & Tarja Nikula. 2010. Identity construction in ELF contexts: A case study of Finnish engineering students working in Germany. *International Journal of Applied Linguistics* 20(2), 251-273.
- Weedon, Chris. [1987] 1996. *Feminist practice and poststructuralist theory*, 2nd edn. Oxford: Blackwell.

付録. トランスクリプトの表記記号

(()) 補足の説明

= 間隔のない連続した発話

[同時発話の開始

[...] 中略

An Exploratory Study on ELF Communication and Identity: A Combination of Interactional Analysis and Narrative Approach

野 上 陽 子

本稿では、共通語としての英語 (English as a lingua franca: 以下 ELF) を通じた異文化コミュニケーションにおける ELF 話者のアイデンティティ形成と変容に関する調査を行ううえでの、ことばの相互行為分析とナラティブ・アプローチを融合させることの有効性について考察した。近年、応用言語学分野でも第二言語話者のアイデンティティ構築に関する多くの研究が行われるようになってきている。これらの研究は、インタビューや日記などの語りをデータとするナラティブ・アプローチを用いて、対象者自身の経験を中心としたエミックな視点 (emic perspective) から第二言語話者のアイデンティティについて考察している。しかしながら、第二言語話者のアイデンティティに関する研究においては、第二言語話者たちが参加するコミュニケーションから産出される言語形式 (linguistic forms) およびことばの相互行為の分析とナラティブ・アプローチを融合させた研究が求められるようになってきた。したがって本稿では、ことばの相互行為分析とナラティブ・アプローチの融合の可能性を論じた文献研究をまとめ、そこから得られた知見を実際のデータ分析に応用することで、ことばの相互行為分析とナラティブ・アプローチを融合した方法論の有効性と今後の課題を探った。